

恋に狂い咲き 2

1 ふたりの朝
（真子）

湯船の中で、ゆらゆらと揺れる色とりどりの薔薇の花びら……

それを見つめながらシャワーを浴びていた芳崎真子は、シャワーを止め、満ち足りた気持ちでその場にしゃがみ込んだ。バスタブの縁に手を添え、浮かんでいる花びらをもう片方の手ですくう。

胸が甘く膨らみ、笑みが零れてしまう。

昨夜、真子は愛する人……朝見和磨と結ばれた。

そしてこの薔薇は、和磨から贈られたもの。彼女ひとりでは抱えきれないほど大きな花束だった。和磨さんつてば、花屋の薔薇を全部買い占めたなんて、ほんと……ありえない。

くすつと笑った途端、涙がぼろりと零れ落ちる。

真子は笑みを浮かべたまま、手の甲で涙を拭いた。

指の間から水が落ち、手のひらには花びらだけが残る。

おまけに、花束の重みに顔をしかめて、『失敗した』なんて口走るし……

そのあとアパートに戻ってお風呂に浸かっていたら、わたしに断りも入れずに、浴室のドアを開けて……

驚いた瞬間、頭上から薔薇の花びらが降り注いで……あつという間に湯船は薔薇の花びらで埋め尽くされていた。

あんなことしちゃうなんて……ほんと、彼はとんでもない人だ。

しかも、和磨さんって……朝見グループの会長の息子だったのよね。

世に言う御曹司というやつで……

凜子叔母さんから、金持ちだけは絶対に相手にするなって口を酸っぱくして言われ続けてきたのに……

怒り狂った凜子が目に見えるようで、真子の顔が歪む。

どうしよう？ 和磨さんが、朝見グループの御曹司だなんて、とても伝えられそうにない。けど、内緒にし続けるなんて無理だろうし。和磨さん、どうするつもりなのかしら？

彼のことだ、きつとまったく悩むことなく、あっさり事実を口にするんじゃないかしら？

でも、凜子叔母さんだって簡単に引き下がる人じゃない。

ふたりの壮絶なバトルが、容易に目に浮かび、先行きが不安になってくる。

和磨さんと出会えて、思いが通じ合って、言葉にできないほどしあわせだけど……

これからの自分が、どうなるのかわからない。いま和磨さんはこのアパートで暮らしているけど、このままではいられないだろうな。

しかも昨日、同僚の野本拓海が、自分の実の兄だという驚くべき事実を、真子は知ることになった。しかし、まだ全然実感できないでいる。

だって昨日の今日なんだから。野本さんがわたしのお兄さんだなんて……おまけにお父さんまで登場して……

情報としては頭にインプットできても、なかなか気持ちがついてこない。

お父さんとは、会ってもないし……仕方がないのかも……

真子は、父親がどんな人物なのかまるで知らないし、母や自分のことをどんな風に思っているのかもわからない。

会えば、ちゃんと自分の父だという実感が湧いてくるものなのかしら？

野本さんは、お父さんはお母さんのことをいまも愛していると言った。だから亡くなったことをどうしても告げられなかったって……

そのため拓海は、真子にも兄だと名乗らず、同僚として働き続けてきた。考えたら凄いいことだ。妹である真子の側にいるためだけに、拓海は真子の会社に転職してきたのだから。

それだけ、わたしのことを実の妹として大切に思ってくれていたって……

わたし、もつともつと野本さんに感謝するべきよね。

拓海が真子に、自分は兄だと名乗り出なかったのは、ひとえに父の気持ちを慮ったことだったらしい。名乗り出せば、真子は父親に会いたがるだろう。そうしたら、拓海はふたりを引き合わせることになる。その場合、当然、父は母の死を知ってしまう。父が受けるショックを思うと、とても伝えられなかった、と。

それを聞いて真子は凄く嬉しかった。亡くなる間際まで父に宛てた手紙を書き続けていた母の想

いが報われた気がして……

いま、父がどんな思いでいるのか、真子には知りようがない。もし母の死を拓海から聞き、嘆き悲しんでいるとすれば、胸が痛む。だが……父という存在を実感できていないせいか、心から親身になれない部分もあった。

わたしって、情知らずなのかしら？

ひとりでいた時間が長すぎて、肉親に対する情が欠落しているのかも……

そういえば、和磨さんに、『父親が見つかつたわけだし……兄や父と一緒に暮らしたいんだろかな？』って聞かれたんだった。野本さんからも、これからは一緒に暮らしたいって言われたけど……

やっぱり、わたしはこれから、野本さんやお父さんと暮らすことになるの？

不安がむくむくと膨らんでくる。

それに凜子叔母さんにはなんて言おう？ 話したら……たぶん……

凜子の反応を想像したら、強烈な不安が湧いてきた。

い、怒り狂うわよね。和磨さんが御曹司だつてこと以上に……

なにせ凜子は、元々父と拓海のことを知っていたのだ。だけど真子には内緒にしてきた。なのに自分の知らぬところで、真子が父親に会つたりしたら……

うわーっ、考えるだけで怖い！

なんだかもう、頭がいっぱいだあ。何をどう考えればいいのかわからなくなつてきちゃった。

「真子」

頭を抱えるようにして、うんうん唸つていたら、ふいにドア越しに呼びかけられた。

和磨の声にぎよつとした真子は、慌てて立ち上がる。

「は、はいっ」

「君、大丈夫か？」

なにやら、ひどく不安そうに問いかけてくる。

「だ、大丈夫です」

「本当か？」

シャワーを浴びているはずなのに、音がしないから心配してくれたのだろう。

「も、もう上がるところで……」

「了解」

その返事にほつとした途端、ガラツとドアが開けられた。

「えっ？」

呆気にとられて和磨を見る。

「いい眺めだ」

「な、な、な……」

和磨ときたら、にやつきながら真子の裸体を眺め回している。

「か、和磨さん！」

抗議の声を上げると、和磨はさつと手を伸ばし、真子の肌に触れた。

「綺麗だな」

和磨が満ち足りた顔で見つめているのは、鮮やかな赤い痣。彼につけられたキスマークだ。見つめられていると思うと落ち着かない。隠そうとしたら、和磨は手を掴んで邪魔をしてきた。そして、すつと顔を近づけてきたかと思うと、赤い痣に軽くキスをする。

驚く間もなく、和磨は片腕を真子の身体に回し、絡め取るようにして、強引に自分に引き寄せた。「か、かず……」

「いい匂いだな」

真子の肩に和磨が顔を寄せる。唇が肌に触れ、びくりと身を震わせてしまった。そんな真子に構わず、彼は楽しげに息を吸い込む。彼の暴挙に、真子の心臓は爆音を轟かせている。

「薔薇の香りが染みついた真子か……思う存分味わいたいが、そんなわけにもいかないな……朝飯が先だ。すでに限界まで腹が減った」

「あ……す、すみません。すぐに」

「ほら、拭いてやるう」

和磨はバスタオルを手に取り、真子の身体をかいがいしく拭き始める。

「じ、自分で拭きます」

「やらせてくれ。やりたいんだ」

やさしく囁かれ、その甘い声の響きに、頬が焼けそうなほど火照る。こんな状況に免疫がないため、どうしてもいいかわからない。

でも……泣きたいくらいしあわせかも。

このままずっと和磨さんと暮らしたい——そんな気持ちが込み上げてきて、胸が押し潰されそうになる。

わたし、どうしても野本さんの家に引越さなきゃならないのかしら？

和磨さんは、これから先もずっと、わたしと一緒に暮らしたいとは思ってくれないのかな？

「真子、何を考えてる？」

「な、何を……別に」

「考えてるだろ？ しかも、ネガティブな感情を抱えてる」

ええっ！ 和磨さん、ど、どうしてわかるの？

「……当たり前か。俺のことか？ それとも野本のことか？」

真子は顔をしかめた。

「なんか、考えれば考えるほど……実感がなくなつて。野本さんがわたしの兄だったって……本当なんでしょうか？」

こんなことを尋ねられても、和磨も困るだろうが……

「事実だな」

きっぱりと断言され、真子は目を見開いた。

「信じられないでいるのなら、何度でも言っただろう」

「和磨さんってば」

「何がおかしいんだ？」

「だって……そんな返事をもらうとは思っていなかったから……ほんと、和磨さんって意外性の塊かたまりですね」

「そうか？ それより、これからどうするか決めなきゃならないぞ」

「これから？」

それは、野本の家で暮らすことを言っているのだろうか？

「野本は、君と父親を近いうちに会わせるつもりだろう」

あ、ああ……まずはそうよね。会わないことには何も始まらない。

ちよつと落ち着かなきゃ。何よりも一番に考えなきゃならないのは、凜子叔母さんのことかな……

「あの、まずは凜子叔母さんに、今回のことを報告すべきじゃないかと思うんです……」

「凜子さんか……」

和磨は思案しあん深げひかに呷つひやく。

「叔母さんは、兄や父のことをわたしに内緒にしていたくらいですから、今回のことを話したら、会うことに断固だんこ反対するんじゃないかと思うんですけど……それでも、叔母さんに内緒にして会うとか、するべきじゃないと思うんです」

「うーん」

「あつ、そういうえば……」

「うん、どうした？」

「野本さん、凜子叔母さんの存在を知らなかったんです。お父さんから聞かされてなかったみたごと」

「これはいよいよ複雑なようだな」

和磨が顔をしかめる。そんな彼の表情を見て、真子は気を落とした。

「そうですね。もう……どうしたらいいんでしょう」

「真子、俺の意見を聞くか？」

そんなことを聞いてきた和磨を、真子は驚いて見つめた。

「和磨さん、何か妙案みょうあんでも浮かんだんですか？」

「妙案というか……凜子さんには何も言わずに、君はとにかくお父さんと会ったほうがいい」

「そ、そうでしょうか？」

「ああ。でないと板挟みになって、どうにもならなくなるぞ」

「でも……あとから話したりしたら……」

「そりゃあ怒るだろうな。だが、君には俺がついている。心配するな。なんとかなるさ」

「和磨さん……」

その発言は嬉しいし、ありがたかったが……

「でも……わかっていると違いますけど、和磨さん自身も、凜子叔母さんの逆鱗ぎやくりんに触れる事情を抱えますよ？」

なんととっても凜子はお金持ちが大嫌いなのだ。

「思い出したくないことを……」

顔をしかめる和磨を見て、真子は思わず嘖き出してしまった。

「まあ、大丈夫だ。それについても君は心配するな」

「なんとかできるのか？」

「いや、なんともできないだろうな」

安心できない返事をもらい、顔が歪む。

「和磨さん」

不満を込めて名を呼ぶと、和磨は「冗談だ」と笑って返す。

「俺としては、誠意をもって接するだけだ。きつと最後には許してください」

「……前向きですね」

むっとして言うと、和磨は真子をなだめるように、ほっぺたを指先でやさしくつついた。

「ああ。それが取り柄だからな」

「凄（す）い取り柄ですよ。わたしもそうありたいです」

「そう思うなら、そうあればいいだけだ」

「簡単に言いますね」

「俺に言わせれば、君は何事も難しく考えすぎだな」

「……そうなのかしら？」

「ほら、いつまでも裸でいたら、俺の目の保養にはなるが、風邪を引いてしまうぞ。さっさと服を

着ろ」

論（ろん）すように言ったかと思うと、和磨は真子が用意しておいたショーツを両手で広げるようにして持ち、しげしげと眺（なが）め始めた。

「も、もおっ、和磨さんったら、何してるんですか？ 返してください」

ひったくるようにしてショーツを奪った方がいいが、肩にかけていたバスタオルが足元にはらりと落ちる。

「ああっ！」

真子は慌（あわ）ててバスタオルを拾い、顔を真っ赤にして身体に巻きつけた。そんな真子を、和磨はにやにやしながら眺（なが）めている。

「和磨さん！」

憤（い）りを込めて呼びかけたら、今度はブラジャーがひょいと目の前にぶら下げられる。

「もおっ！」

「着（き）けてやるのか？」

ブラジャーを振りながら、和磨はそんなとんでもない申し出をしてきた。

むっとした真子だが、……いつの間（ま）にやら心が軽くなっていることに気づいた。

そんな自分を笑ってしまいそうになりつつも、真子はブラジャーを奪い返し、その場から和磨を追（お）い払（は）った。

ほんと、和磨さんには敵（か）わないな。

ひとりになった真子は、くすくす笑いながら下着を身に着け、服を着込んで洗面所を出る。キッチンにいた和磨は真子にすぐに気づき、顔を向けてきた。

「ちよど飲みごろだぞ」

紅茶のいい香りが漂っている。自分以外の人が淹れたお茶が香るという状況が、なんとも胸に温かく沁みる。

わたしはいま、ひとりじゃないんだ……

そのとき、チンという音が響いた。どうやら、トーストが焼き上がったようだ。

「トースト、わたしが出します」

「ああ、頼む」

何気ない朝の会話なのに、真子の胸は喜びではちきれそうだった。

2 さつぱりわからず 和磨

どうやら、身体は大丈夫なようだな。

きゅうりをカリカリと音を立てて食べている真子を見て、和磨は改めてほっとする。

真子がシャワーを浴びに行つたあと、何気なくベッドの上掛けを剥いたら、そこに真っ赤な染みが残っていて……仰天させられた。

俺が無理をさせすぎたつてことなんだよな？ あの行為の最中、真子は凄く辛そうだったのに、俺は欲望につき動かされて、十分に気遣えなかった。

それで慌ててシャワーを浴びている真子のところに行き、声をかけたのだが……

色々考え込んでいたようだが、真子が患部を気にしている様子は見受けられなかった。

真子が初めてだったから、なのか？ なんにしても、もっと気を使わないとな……真子を傷つけるようなことだけはしたくない。けど、あの行為の最中、冷静ではいられないんだよな。

思案に暮れていた和磨は、真子が見つめていることに気づいた。

「どうした？」

「あ……いえ……和磨さんって、料理も上手だし……なんでもできるんだなあって、感心してただけです」

「できないじゃないんだが……そうだな。できないという意識を持っていないだけだな」

そう言ったら、真子が面食らつたように目をパチパチさせた。

「和磨さん、できないという意識を持っていないんですか？」

今度は、なぜか尊敬するような口調になっている。和磨は眉を寄せた。

「真子、なんでもできると言っているわけじゃないぞ。できないと決めつけないだけさ」

「決めつけない？」

「そういうこと。できないと自分勝手に決めつけて、実際にやってみもしない人の気持ちに僕にはわからない」

真子の頬が赤らむ。その表情は気まずそうだ。できないと決めつけたことが、あったのだろう。「目指すものに向かって歩み続けていれば、そのひとりなりに目標に近づける。いま自分がどこにいるかは、あまり問題じゃないと僕は思うのさ」

「そうかも……」

納得したように咬く真子に、和磨は笑った。

「まあ、僕はひとり暮らしが長いからな。ひとりでやるしかないから、自然と家事もこなせるようになった」

トーストをかじりながら説明すると、真子は驚いたような顔をする。

「ひとり暮らししてたんですか？」

真子の驚きっぷりに、和磨は戸惑った。どうしてそんなに驚くんだろうか？

「ああ。早くひとり立ちしたくてね。大学入学と同時に家を出た」

「どうして？」

信じられないとでも言うような声に、和磨は眉を寄せてしまう。

「どうしてって言われてもな……」

「ご両親がいるのに一緒に暮らさないなんて、もったいない……っていうか、おかしいですよ」

「真子……」

そうか……

ようやく真子の気持ちがあった。和磨は手を伸ばし、癒すように彼女の首筋を撫でる。

「僕は、両親と充分一緒に過ごしたからな……」

「でも」

「真子、子どもはいずれ親元から単立つものだ」

和磨がそう論しても、真子はどうにも納得できないようだ。

ひとり暮らしをするしかなかった真子にとって、和磨の考えは受け入れ難いものなのかもしれない。ない。

「けど、君はこれから……」

和磨は途中で言葉を止めてしまった。

『父や兄と暮らせるぞ』なんて、言いたくない。俺だって真子と暮らしたい。

ひとりだった真子の前に、いま父と兄が現れた。彼女はもうひとりで暮らす必要はないのだ。血の繋がった家族とともに暮らせる。それは真子にとって、喜ばしいことだ。そう心から思う。

だが！ 俺だって真子と暮らしたい！

真子が了承してくれるのなら、今日にでも婚姻届を提出して、夫婦になってもいい。

「和磨さん？」

黙り込んだ和磨に、真子は怪訝そうに呼びかけてきた。

「——父親と暮らしたいか？」

聞くつもりはなかったのに、その言葉は彼の口から飛び出していた。

もちろんと即答すると思ったのに、真子は返事に困っている。

この反応はもしや……俺と暮らし続けたいと思っっているんじゃないのか？

希望が見え、和磨は答えを催促するように「真子」と呼びかけた。

「父と、暮らしたくないわけじゃないです」

真子が静かに口にする。期待したぶん、和磨はしょぼくれた。

だよな……

「でも……和磨さん、いまはここにいないんだし……だから、わたしがここにいないと……

和磨さん困るだろうから」

和磨はハツとして顔を上げた。

俯うつむいている真子の頬は、赤く染まっている。じっと見つめていると、真子がおずおずと顔を上げ

てきて、ふたりの視線が合う。すると、真子は顔を歪ゆがめて視線を外し、トーストを急いで頬張ほぼった。

どうにも胸が熱くなった。

「よかった。……行き場がなくなるかと、思った」

真子はコクンと頷うなずいた。その仕草に、抱えきれないほどの愛情が込み上げた。

流し台の前にふたり並び、仲良く朝食の片づけをするのは、すこぶる気分がよかった。

真子は俺とここで暮らしたいと思ってくれているんだ。もちろん、この先の流れによつては、それは無理になるかもしれない。だが、真子がそう思ってくれたということが嬉しい。

まあ、順当に考えて、真子は父や兄と暮らすのが一番だろう。だが、それも一年程度にしてもら

うつもりだ。

さつさと手筈てはづを整えて、結婚してやる。

皿を食器棚に戻しながら決意する。

野本の家にも入り浸ひたってやるう。いつそ、頼み込んで俺も同居させてもらうか。

真子によれば、父親はかなりの資産家らしいから、部屋も余ってるかもしれない。

「ねえ、和磨さん」

「うん？」

今後の見通しを明るく思い描いていた和磨は、呼びかけに振り返ったが、真子はずいぶんと思案しあん顔がほだ。

「どうしたんだ？」

「わたし……本当にお父さんに会っていいんでしょうか？」

「なんで？」

「だって……父は再婚しているんじゃないかって思っ……」

再婚？

「そう思えるようなことを、野本が言ったのか？」

「野本さんから聞いたとかじゃなくて……実は、野本さんが凄まじく手の込んだ豪華なお弁当を職場に持ってきたことがあって……きつとお母さんの手作りだって思っただんです……」

「そうなのか？ まあ、君に父親の記憶がないということは、君が物心つく頃には、ご両親は離婚

されていたということだろうからな……そういう可能性もないとは言えない」

何気なく口にしていた和磨は、真子の表情が曇ったのを見てハツとした。

「……無神経だった。ごめん」

真子に歩み寄り謝罪すると、彼女は黙って首を横に振った。

「もし、お父さんが再婚しているなら、わたしなんかがこのこ出ていけないほうがいいと思うんです。野本さんは、わたしと父を会わせたいと思うんですけど……あんな手の込んだお弁当を作ってくれるってことは、野本さんは、義理のお母さんとうまくいつているんだらうし……わたしのせいで不仲になったりしたら……」

「おいおい真子、どこまで勝手に想像を巡らすつもりだい。まだ再婚していると決まったわけじゃないぞ」

「そ、そうですけど……でも、もし再婚しているなら、母の残した手紙も……父に渡さないほうがいいですよ？」

そうか。真子は母親の残した手紙のことを考えていたのか。

父に渡してやれる、亡き母も喜んでくれる、そう思っていただろうからな。

沈んでいる真子が、どうにも不憫ふびんに感じる。

「もしかしたら、あいつの彼女じゃないのか？」

「はい？ 野本さんに彼女ですか？」

「ああ。君が知らないだけで、案外付き合っている相手がいるのかもしれないぞ」

「……まあ、あるかも」

「だが、もちろん義理の母が作ってくれたという可能性もある。そして、使用人が作ってくれたという可能性もあるな」

「し、使用人？」

「あとは、お祖母さんとか……」

「祖母は亡くなったそうです。昨日、野本さんから聞きました」

「そうか……君は会うことは叶わなかったわけか……残念だな。お祖父さんは健在なのか？」

そう聞いたら、真子は首を横に振って「たぶん、亡くなっているんだと思います」と言う。

「はつきりしないのか？」

「叔母さんと一緒に暮らしていたときに、父とか祖父母についても聞いてみたことがあって……」

「でも、口にしたがらなかった？」

「はい。それでも……なんか叔母さんは祖母のことをあまり好きじゃないんだってというのが伝わってきて……そのとき祖父のほうはもうこの世にいないんだって、なんとなく……」

そう語る真子は、何か気になることがあるようだ。

「真子？ 何か気にかかることもあるのか？」

「野本さんも、祖母が嫌いみたいだったなって……」

「ふーん」

……何やら、気になるな。

いずれ、凜子にも話を聞けるようになるだろうが、いまずぐは聞けない。まずは拓海に色々と事情を聞くのがいいだろう。そして拓海のお父さんからも……

「真子、これから野本の奴に電話するでしょう。あいつは真実を知っているんだからな」
「……そう、ですわね」

「事実を知るのが怖いか？」

真子は恥ずかしそうにこくりと頷く。

「大丈夫、君には俺がついてる。だが、たとえ再婚しておられようと、君は父親に会えばいいんだ」
そう口にした和磨は、自分の心が軽くなっていることに気づき、少し気まぎれになった。

父親が再婚しているのなら、真子が野本の家で暮らすという選択肢はなくなるんじゃないのか？ それなら、俺はこの先も真子と一緒に暮らせる。

それとも、義理の母親は、拓海の妹である真子を引き取りたいと望むだろうか？

そんなことをとめどなく考えていた和磨は、ふと我に返って自分に呆れ果てた。

真子に感化されすぎだな。事実を明らかにできる手段があるのに、あれこれ考え込むとは、俺らしくない。まあ、真子の感化なら悪くないか……

思わずくくつと笑うと、それに気づいて真子が和磨のほうを向く。

「どうしたんですか？」

「いや……君を愛してるってことを実感した」

「は、はい？ も、もおっ……もう少し普通の返事してください」

「なんだ、普通の返事って？」

「予想外すぎるんですよ。……だから戸惑わされちゃうんです」

「俺の愛の言葉が予想外だっというのか？」

「もう知りません」

真子はプリプリしてキッチンから出ていく。

何が気に障ったのかさっぱりわからず、和磨は途方に暮れたのだった。

3 こっちの台詞（真子）

ほんとに、もおっ！ 和磨さんってば、あんな風に人の不意をつくなんて……
君を愛してるってことを実感した……とか……あー、顔が火照る。

「真子、野本に電話するか？」

部屋の入り口から和磨が問いかけてきた。

拓海に電話すべきだが……向こうの状況がわからないから、勇気が出ない。

「向こうからかけてくるのを待つんじゃないダメですか？」

気弱な発言に、和磨が苦笑する。

「君がそうしたいなら、そうすればいい。それじゃ、俺はこれから浴槽にぶち込んだ花びらを掃除

してくるとするよ」

「わたしがやりますよ」

「いや、ぶち込んだのは俺だからな」

そう言うのと、和磨は浴室に向かう。

「和磨さん、花びらを入れる袋とか……」

「もう用意した」

さすが和磨さんだ。抜け目がない。

和磨が行ってしまい、ひとりになった真子は迷いに囚われた。

野本さんにさっさと電話して、再婚しているのかだけでも確認すればよかったかしら……

真子の足は自然と浴室に向く。

和磨は花びらをザルですくい上げていた。

あつ、それキッチンザルのザル……まあ、この場合は仕方がないか……

「どうですか？」

「ああ、すぐに終わりそうだな。ああ、このザル、勝手に使ってしまったが、今日買い物に行って、新しいのを買えばいいよな？」

「はい。せっかくだから、和磨さんに素敵なザルを買ってもらおうかしら」

冗談で口にしたら、和磨はすぐに乗ってきた。

「楽しそうだな。雑貨の品揃えのいいところはあるかい？」

和磨と雑貨を見て回るなんて楽しそうだな。

「行きたいところがあったんです。どこでも連れていってもらえますか？」

「ああ、君が行きたいなら、どこでもいいぞ」

その返事に嬉しさが込み上げる。車のない真子は、行きたい店があっても、足を延ばすのが大変だったのだ。だからおのずと、出かける先はバスや電車で行けるところばかりだった。

これからは、車でしか行けないような場所も、連れていってもらえるんじゃないかしら？
生活の幅がグーンと広がる感じに、真子の心が弾む。

「そうだ、真子」

「はい」

「シーツを洗ったほうが……」

「ああ、はい。これから取り替えますね」

そう答えた真子は、さつそくベッドのところに戻った。が、その乱れっぷりを見て顔を赤らめる。ベッドがこんな乱れたわけを思い出しそうになり、真子は「わわわーっ」と叫びながら、パツと上掛けを剥いだ。すると、シーツのほぼ中央に赤い染みが……

ぎよつとした真子は、三歩うしろに後ずさった。そして、なぜか左右をパッと確認し、シーツを驚掴みにする。それを丸めて胸に抱え込んだ真子は、洗面所に駆け込み、シーツの塊をドラム式の洗濯機に力任せに押し込んだ。

「真子、血の染みがついていたらどう？ そのまま洗うとシミが残ってしまうぞ」

ハアハアと息を荒ら^あらげていた真子は、和磨のあからさますぎる言葉にさつと振り返った。頬が焼けるように熱い。

「そんなに恥ずかしがる必要ないだろう？」

花びらがいっぱい詰まった袋の口を縛りながら、少し不服そうに言う。

「み、み、み……」

動揺から言葉を出せずにいたら、和磨がこちらを向いた。

「うん？」

「見たん、ですか？」

喉を詰まらせながらようやく口にする。顔の熱も、さらに増している気がした。

「シーツのシミか？ 知つていなければ、君に言えないだろ」

確かにその通りだ。その通りだけでも……

「それより、大丈夫なのか？ 出血したところをそのままにしておいても……」

「か、和磨さんってば！ そんなこと口に出さないでください！」

猛烈に羞恥^{しゆうち}心が湧き、真子は和磨を怒鳴りつけた。

「なんで？」

和磨は訝^{いぶ}かそうだ。真子の気持ちをさつぱり理解できないらしい。

和磨さんときたら、いつもは困るくらい聡^{さとし}い人なのに……わけがわからない。

「もう……もう、恥ずかしすぎて死にたいかもお」

この場で和磨に何を言っても無駄とわかり、無意識に独り言を呟^{つぶや}く。

実際、頭に血が上りすぎて、このまま倒れそうだ。

「なんでそんなに恥ずかしがるんだ？ あの赤い染みは、僕らが結ばれた証のようなもの……むぐぐ」

真子は和磨に飛びつき、彼の口を思い切り塞いでやった。

「もういいです！ もういいから、和磨さん黙って。向こうに行つててくださいい！」

「わけがわからないな」

花びら入りの袋を手にした和磨は、ぶつくさ言いながら洗面所から出ていった。

わけがわからないって……それはこっちの台詞^{せりふ}だというのだ。

プリプリしつづ、洗剤を入れて洗濯をスタートさせようとした真子は、ハッと手を止めた。

そ、そうだった。血の染みを先に洗わないといけないんだったわ。

それにしても、そのまま洗うとシミになるぞなんて指摘を、男の人からもらっちゃうなんて……

おかしさが込み上げ、真子はくすくす笑い続けた。

「ここかい？」

和磨が車のナビ画面を指して聞いてくる。真子は顔をしかめた。

「そこ……じゃないでしょうか？」

曖昧に答えると、和磨が眉を寄せる。部屋の掃除を終え、約束していた素敵なザルを買いに行くと、車に乗り込んだのだが……真子の行きたい店をナビに登録しようとして、手こずっている。

店の名前も住所もろ覚え。真子も記憶にある情報を思い出しながら和磨に伝えるのだが、そんなものはナビ登録の役には立たないらしい。

「あの、どこでもいいです。大型のショッピングセンターなら、色んなお店があるでしょうし。ああ、それに、行ったことがないところなら、かえって嬉しいかも」

「そうか。なら、ここに行ってみるか？　ここなら、車で十五分もあれば着く」

「はい」

和磨が選んだ店に行くことに決めると、車が走り出した。真子はほっとして助手席の背に凭れた。

「そうだ。君のお母さんの墓にも、一度お参りさせてもらいたいな。墓地はここから近いのかい？」

「それが、凄く遠いんです。電車で二時間以上かかります」

「そうか……それなら明日だな。真子、明日の朝早くに行くとしようか？」

和磨の決断の早さに、真子はいささか驚かされた。

「は、はい。お母さんも喜びます」

胸が膨らんだ。お母さんに和磨さんを会わせられるんだ。彼を突然連れていったら、お母さんびっくりするんじゃないかしら……うん？　考えてみればお墓に行くまでもなく、お母さんはすべてを知ってるのかな？　あの世のことはよくわからないけど……

まあ、そんなことはどうでもいいか。和磨さんを連れていけば、お母さんは絶対に喜んでくれる。真子は嬉しくて、にっこりと微笑んだ。

到着したショッピングセンターは、真子が訪れたことのない場所だった。和磨もここは初めてらしい。

「初めて同士で、なおさら楽しいかも」

知らぬ間に、はしゃいで独り言を口にしてしまう。

「そうだな」

口にした自覚がなかった真子は、和磨から返事をもらってしまい、ぎよつとした。

「なんだ？　何を驚いてるんだ？」

「……声に出していたつもりがなかったので、返事をもらってびっくりしたんです」

恥ずかしくて、ぼそぼそと告げたら、和磨が声を上げて笑い出した。

「そういえば……君は独り言をよく口にしていたな。あれも自覚なしに声に出してたのか？」

その通りだ。友人の島津奈々子からも、ちよくちよく指摘されている。

顔を赤らめていたら、頭にボンと手が置かれた。見上げると、和磨はくすつと笑い、それから少し切なそうな表情をする。

「和磨さん？」

「いや……なんか胸が苦しくなった」

「は、はい？　だ、大丈夫ですか？　具合でも……」

「そうじゃない。僕は大丈夫だ。根っからの健康優良児だからな。病気になることがない」

「そうなんですか？　凄いですね」

「君は？」

「はい？ わたしですか……わたしは人並みに風邪も引くし……」

「そんなとき、どうしてた？」

「それはもちろん、横になって安静にしてみましたけど……」

そんな当たり前のことをどうして聞くのだろうと首を捻っていたら、和磨の表情が先ほどよりもっと切なそうなものになる。

「和磨さん？」

「いや……その場に行ってやりたくなる」

「え？ あ……」

そ、そうか……和磨さん、病気になったわたしを可哀想に思ってくれてるんだ。

元気なわたしが、いま目の前にいるのに……

そういえば前も同じようなことがあった。過去の真子が可哀想だつて言い出して、過去の真子を自分にできる精一杯で慰める、なんて言い出したのだ。思い出して、どうにも胸が震える。

「ほら、和磨さん、素敵なザルを探さない」と

真子は胸の震えを誤魔化すように、明るく言った。

「そうだな」

和磨はそう返事をし、左手を差し出してくる。真子は胸をいっぱいにして、その手をぎゅっと握りしめた。

4 心に感じるまま 〈和磨〉

ふーむ、これはどうやって使うんだろうな？

くるくる巻かれたひも状のものがケースに入っている。万能ワイヤー？

手に取って裏返してみたら、色々な使用例が明記してあった。コード類の結束、本を開いた状態で固定するブックストッパーなど、多種多様だ。

面白いな。試しにひとつ買ってみるか……

「真子」

隣に顔を向けて声をかけたが、そこにいたはずの人物がいない。

あれっ？ 真子はどこに行ったんだ？

周囲をあちこち見回すが、どこにも姿が見当たらない。和磨は手にしていた商品をどうしようか迷い、結局棚に戻した。店内を一通り回って探すものの、真子は見つけられなかった。

いったい、どこに行ってしまったんだろうな？ 俺の隣で商品を見ていたはずなのに……

店の入り口に戻って通路を眺め回していたら、こちらに向けて手を振っている真子が視界に入った。ほっとした和磨は、急いで彼女に駆け寄る。

「どうしたんだ？」

そう話しかけたが、どうやら真子は携帯で誰かと話しているようだ。相手は、たぶん……
「野本か？」

そう尋ねたら、真子は驚いた顔をしたあとで、うんうんと頷く。うん、こういう表情も可愛いな。
「あつ、はい、そうです。いま一緒に買い物をしているところ……」

和磨を見つめたまま、真子は拓海と会話を続ける。

「シヨッピングセンターです。……どこのつて……」

真子から問うような視線を向けられる。和磨は「代わろう」と言つて真子から携帯を受け取つた。
「やあ、野本君」

わざと上司の口調で語りかけたら、「専務」と、気を引き締めたような返事があつた。

同じ歳なのに、こいつは俺のことをかなり年上だと思ひ込んでいるからな。

「シヨッピング中ですか？ 驚きましたね、お忙しいんじゃないんですか？」

苦々しさと嫌味を帯びた物言いに、くすりと笑つてしまう。

「焼きもちか？」

「……嫌な人ですね」

「なんだ、君は意外と素直な反応をするんだな。それで、もうお父さんには伝えたのか？」

「本当に嫌な人だな」

むっとした声に、ぴんときた。

こいつ、真澄さんが——真子の母親が亡くなっていることを、父親に伝えられずにいるな。

昨夜、拓海は家に戻つたら、母親が亡くなっていることを父親に話すと言つていたが……それが拓海にとって簡単なことではないのは明らかだつた。

「私の提案を聞くか？」

「提案？」

ずいぶん嫌そうな声だつた。和磨に助けなど求めたくないということだろう。

「……ありがたく聞かせていただきますよ」

おやおや、よほど切羽詰まっていたか……

「真子に伝えてもらえ」

そう口にした途端、目の前に立つ真子が目を見開いた。携帯からも「真子に？」と、拓海の驚いた声が聞こえてくる。

「ああ。真治さんも、真子から聞いたほうが、いくぶんシヨックが少ないだろうと思う」

拓海が黙り込んだ。思案しているようだ。

「あの、どういうことですか？」

「君から、真澄さんが亡くなったことを伝えるのがいいんじゃないかと提案した。君はそんな役目は引き受けたくないか？」

そう問いかけたら、彼女は凜とした表情で、首を横に振る。その反応は、ちよつと意外だつた。

「引き受けるのか？」

「はい。お父さんには、わたしから伝えます」

「だそうだぞ。聞こえたか、野本？」
「ええ」

拓海の声はひどくテンションが下がっていた。

「嫌な役目を真子に押しつけてしまっただけいいのかと、悩んでいるのか？」

「ほんっとーに、嫌な人だな、貴方は」

力の込められた拓海の声に、笑いそうになる。

「じゃあ、いつにする？ 私はいますぐがいいと思うが……」

「えっ！」

真子の叫びが、電話の向こうの拓海の叫びと重なる。

「こ、これからですか？」

「こ、これからですか？」

ふたりは、まるきり同じ言葉をほとんど同時に叫んだ。

「ああ。先延ばしするのは、かえってマイナスになる気がする。……野本、真治さんは、いますぐにでも娘に会いたいとおっしゃっているんじゃないのか？」

「もちろん会いたがってはいますよ。だけど……」

「ふーん、なるほど」

「専務、話の途中で、わかったような相槌を打たないでくださいませんか」

「なんとなく伝わってきたから……」

真子と同じように真治さんも躊躇い、そして恐れ of 感情に囚われているのだろう。それはふたりが顔を合わせるまで続くはずだ。

袖をくいくいと引つ張られ、和磨は真子に目を向けた。

「どうした？」

「これからっていうのはちよつと……明日でいいんじゃないかなって」

「君は、明日もいまと同じ気持ちでいるぞ」

そう指摘したら、真子が顔を歪めた。

「……これから行きます」

真子は硬い声で言う。嫌だけど、仕方がないという感じだが……それでいい。

「これから行くそうだ。では、いったん電話を切るぞ。私たちはすぐに車に戻る。戻ったらこちらから電話するから、そこで住所を教えてください。ナビに登録してそちらに向かう」

「わかりました」

拓海は何か言いたげだったが、和磨はそのまま電話を切った。携帯を真子に返し、彼女を促してそのまま出口を目指す。先ほどの商品に、少々後ろ髪を引かれたが、また真子と来ればいい。

並んで歩きながら、和磨は「真子」と呼びかけた。

彼女は返事をしない。どうやら和磨の声が耳に入っていないようだ。よく見ると、ずいぶん難しい顔をしている。母が亡くなっていることを父に伝えなければならぬからだろう。

和磨はそつと真子の肩に手をかけた。真子が顔を上げる。

「俺は……」

「大丈夫です」

何か言う前に、真子は硬い表情で答えた。

「真子？」

「大丈夫です」

真子の覚悟が見え、和磨は安心した。

「そうか」

「はい」

どこまでも真面目に答える真子が、あまりに愛しくて、和磨は微笑んだ。だが、目が潤んでしまう。

「和磨さん……あの？」

和磨の表情を見て、真子が驚いたように目を睜る。和磨は照れくさくなって笑った。

「いや……君が愛しくてね」

感じるまま口にしたら、真子の顔が一瞬にして赤く染まった。和磨はその変化に目を奪われる。

「もおっ、和磨さんってば、場所をわきまえてください」

文句を言われ、和磨は周りに目を向けた。休日のショッピングセンターの通路は、大勢の人が歩いているが……

「どうしてここはダメなんだ？」

「わ、わかんないんですか？」

呆れたように言われ、和磨は唇を尖らせた。

「そ、そんな顔をして見せても、ダメですからね」

そんな顔？

「真子、それはどういう意味だい？」

「えっ？」

「いや、いま君の口にした言葉の意味がわからなかった」

「わからない？」

「ああ」

「わからない？」

なぜか真子は言葉を繰り返すばかり。結局、それ以上の説明はもらえなかった。

5 思いを言葉に（真子）

ほんと、わけのわからない人なんだからあ。……わたし、同じことばかり言ってる気がするけど……だって……あんなに人がいっぱいいるところで……

普通、言う？ 公衆の面前で、『いや……君が愛しくてね』だなんて、顔から火を噴きそうだったわ。場所をわきまえてほしいと言ったら、どうしてダメなんだって、真面目に口にするんだもの。

しかも拗ねたみたいに唇を突き出して……それがひどく可愛くて、胸がきゅんとしちゃって……そんな顔をして見せてもダメだと言ったら、今度はきよんとするし。

もおつ、なんなの。ああいうの、卑怯だわ。

「真子、どこに行くんだ」

和磨の顔をみずんずん歩いてきた真子は、彼に腕を掴まれて立ち止まった。

「どこって、和磨さんの車を停めた場所に……」

「なら、こつちだぞ」

向かっていた方向とは反対側を指され、真子は眉を上げた。

「えっ、そうでした？」

「ああ。ほら、もう仲直りして手を繋ごう」

和磨が手を差し出す。別に仲たがいでいるつもりはなかったもので、真子は素直に彼の手を取った。和磨はほっとした顔で繋いだ手を握りしめ、促すようにして歩き出した。

車に乗り込むと、和磨が「真子」と呼びかけて、手を差し出してくる。

携帯を貸してくれてくれたことだろう。和磨は、自分で拓海に電話するつもりのような感じが……

「わたしが」

「そうか。なら、頼む」

真子は頷き、拓海に電話をかけた。彼は待っていたようで、すぐさま電話に出た。

「野本さん」

「あつ、真子か」

拓海も、和磨から電話がかかるものと思っていたようだ。

「あの……すまない」

拓海はひどく申し訳なさそうに言う。

「大丈夫ですよ。わたしに任せてください」

そんな余裕なんかないのに、つい自信満々に言ってしまった。

「うん。助かる。真子、ありがとう」

感謝の言葉までもらい、どうにも恥ずかしい。

「真子、あのこと、野本に聞いたほうがいいんじゃないか？」

和磨がそんなことを言ってきたが、あのことというのは……？

「再婚」

ピンときていない真子を見て、和磨は言葉を追加する。

そ、そうだった。お父さんが再婚しているのか、聞かなきゃ……

「あの、野本さん」

だが、ストレートには聞きづらい。

「うん？」

「え、えっと……の、野本さんが持ってきた手作りの豪華なお弁当って……誰が作ってくれたのか
なっつて」

「うん？ ……あれは、梅^{うめ}さんが作ってくれたんだけど……」
「梅さん？」

「僕の育ての母なんだ。家に来たら紹介するよ」

育ての母？ そ、それって、やっぱり再婚してるってことじゃないの？

「あ、あの……家にお邪魔するのは……どこか喫茶店とかにしません？」

「どうして？」

「ど、どうしてって……」

「真子？」

黙っていた和磨が呼びかけてきた。そ、そうだった。和磨さんは、野本さんの住所をナビに登録するつもりでいるのに……

「真治さんは再婚なさっていたのか？」

「再婚？」

和磨の声が届いたのか、拓海が素^すつ頓^{どん}狂^{きやう}な声で叫んだ。

「専務は何を言ってるんだ。父は再婚なんかしていないぞ」

「していない？ していないんですか？ でも、育ての母って、いま」

「えっ？ ああ、梅さんは住み込みで働いてくれている人なんだ。幼い頃から、僕の世話をしてくれていて……」

「なんだ、そうだったんですか」

ああ、よかったーっ！

真子の表情を見て、和磨は察してくれたいらしい。「ちょっと借りるぞ」と口にし、真子から携帯を取り上げる。拓海とやりとりしながらナビを操作する和磨を、真子は軽い心で見守った。

拓海の家に向かって車が走り出すと、再び心がざわついてきた。

こんな急展開で、お父さんに会いに行くことになるなんて。

野本さんのお父さんってどんな人なんだろう？ ……ああ、違う……いや、違うないけど……野本さんのお父さんはわたしのお父さんなんだからね。

野本さん、自分に似てるって言ってたけど……野本さんの顔を老けさせた感じか……って、上手く想像できないし。

性格とか、どうなんだろう？ わたし、どんな風にお父さんに接したらいいんだろう？

もう、考えるだけでガチガチに緊張してきちゃった……

知らぬ間にため息をついた真子は、自分の着ている服に目を留め、ハッとしたり。

「和磨さんー！」

「なんだ？」

「わたし、こんな服なんですよ。こんな服で行っていいんですか？」

「なんで？」

「なんでって……だから、ちゃんと正装したほうが……だって初めてお会いするんですよ。スーツ

とか……和磨さん、何を笑ってるんですか？」

真子が困っているというのに、和磨は笑い出す。真子はむっとして問いただした。

「正装とか言うからだ。……あっ」

笑いながら言っていた和磨が、急に顔色を変えた。

「どうしたんですか？」

「いや……スーツのほうがよかったかなと思ってるな」

「やっぱり」

「いや、君じゃない。僕だ」

「和磨さん？」

「初対面なんだからな。君のお父さんにいい印象を持っていたくためには、スーツのほうがよかったんだが……」

「わたしだって、初対面ですよ」

「そうであつても君は娘だ。僕とは違う」

「それなら、一度家に帰って着替えますか？」

「いや、それはやめておこう。かなり遅くなってしまう」

「そうですか……」

真子は、自分が着ているカジュアルな服を見つめる。

初めての訪問なのに、こんな服でお目にかかったら、礼儀を知らない子だと思われなにかしら？

資産家だつてことだけど……いったいどんな家なんだろう？

敷居^{しきい}をまたぎづらいような、格式のある大きなお屋敷じゃなければいいなあ。

考えたら……このまま和磨さんとの付き合いが続けば、いずれ彼のご両親の家にも行くことになるわよね？

そこまで考えたところで、真子の息が止まった。

和磨さんのご両親は、朝見グループの会長ご夫妻……和磨さんの実家は会長宅……

あ……眩暈^{めまい}が……ちよつと吐きそう……

口を押さえたら、「真子」と呼びかけられた。口を押さえたまま、和磨に目を向ける。

「酔ったのか？」

車に酔ったわけじゃないけど……

「少し気分が……」

「大丈夫か？」

心配そうに聞かれる。真子は頷^{うなず}きながら改めて彼の姿を見つめた。

性格はあれなんだけど……和磨さんって常人とは違うオーラがあるのよね。

なのに、わたしは平凡で……

和磨さんの相手がわたしでは、まったく釣り合っていないわよね？

現実がぐいぐい迫ってきて、身が竦^{すく}みそうになる。けど、いつまでも逃げ続けるわけにはいかない。

「あの、和磨さん……父親って……どんな存在ですか？」

信号待ちで車が止まったタイミングで、真子は大きく深呼吸して、和磨に尋ねた。

「うーん……俺の父はあのままの人だ。いつもひょうひょうとしていて……同じ目の高さにいると思わせるのに、やはり高みにいる」

「やっぱり、母親とは違うものですか？」

「そりゃあ違うな」

「どんな風に？」

「どんなって……俺が男だからかもしれないが、父親は目標みたいなものだったな。まず父を越えることが人生の課題のように感じてた」

「越えられそうですか？」

「越えたのか、とは聞かないんだな」

和磨が苦笑しながら言う。

「確かに、まだ越えられない。もしかすると……あの父は一生越えられないかもしれないな」

「素敵ですね」

「素敵？ どうして」

「和磨さんの手がお父様に届かないのは、きっと、お父様がさらに高みを目指していらっしやるからじゃないかなって思えて……」

和磨はじっと真子を見つめてくる。あまりにまっすぐに見つめられ、そわそわしてしまう。

「そうだな。きっと」

呟くように言った和磨は、真子の右手を取り、両手で包み込んだ。

和磨のぬくもりを感じながら、真子は胸の中にある思いを言葉にした。

「生まれてこのかた、父親がいたことないので、イメージそのものが薄いつていうか……会っても、父親として認識できるのかなって……だって、顔も知らないんです」

「そうだな」

和磨はやわらかに口にし、力づけるようにぎゅっと手に力を込めてきた。

「父にどう接したらいいのかわからなくて……不安で……」

「考える必要のないことだ。——僕と君も逢ったばかりだ。でも、いま……こうしている」

萎縮していた心が、少し楽になった。ひとりぼっちだった真子の隣に当たり前のようにいる和磨。

真子は、温かなものにすっぽりと包まれている感覚に陥った。でも、それは、いま始まったことでない。ただ彼女が、それと気づかなかっただけ……

「神様って、いるみたいですね」

和磨との、そして父や兄との運命的な出会いを思い、真子は冗談めかして和磨に言った。

「そうみたいだ……」

和磨の静かな声に、真子は泣きそうになった。

「もうそろそろ着くぞ」

「えっ、も、もうですか？」

真子は動揺して叫んだ。ようやく落ち着いたはずなのに、心の余裕が一瞬にして消え去る。

「ど、どうしよう」

「俺がついてるぞ」

励ましの言葉に、真子は微妙な気持ちになる。そりゃあ、和磨はどんなに格式のある家であろうと、平氣の平左だろう。真子の気持ちなどわかってもらえないに違いない。

「なんだ、その疑わしげな目は？ 俺じゃ頼りにならないか？」

「野本さんの家が格式のある大きな家だったら、わたしビビっちゃうと思いますけど……そういう気持ち、和磨さん理解できます？」

「……真子」

「はい？」

「好きにビビれ」

「はいっ？」

「何事も経験だ」

「なんですか、それ？ だいたい好きにビビれとか、普通言います？」

真子はプリプリして文句を言った。

「普通ねえ……なら、どんな言葉を口にすれば、普通なんだ？」

「……う」

「ほらみる。普通普通と言ったところで、思いつかないだろう？」

言い負かされて悔しくつてならない。キーツと叫びそうになる。

「着いたぞー」

和磨がからかうように口にし、真子は目を剥いた。

「ど、どこ？」

うわずった声を上げながら周囲を見回す。

「へっ？」

重厚な塀と立派すぎる門構えが目飛び込んできた。

「ま、まさか……ここじゃないですよね？」

「いや、ここだろう。ほら、『野本』と表札がかかっている」

真子は、目の前にそびえる塀の高さに眩暈がした。

「な、なんか……このでっかい門から、参勤交代の行列がぞろぞろ出てきそう」

真子の比喩に、和磨がブツと噴き出した。

「確かに、言いて妙だな」

「でも、どこに車を停めるんですか？」

門の近くに車を停められるような場所はない。というか、この家そのものに隙がないように見える。

「家の周りを、一回りしてみよう。きつとどこかに駐車場があるはずだ」

和磨は塀に沿って、左回りに車を走らせた。

「広いな」

広いなんてものじゃない……

この野本の家に嫁いだときの母の思いが、真子はわかった気がした。

身分違いなんて、一昔前の言葉だと思っていたのに、この屋敷を前にすると、その言葉がぴたりとくる。野本家の屋敷の外観は、真子を怯えさせた。

「あー」

「どうした？」

真子の表情に、和磨は戸惑っているようだった。

「わたし……あの、か、帰ろうかなって……」

心細さに駆られ、真子は和磨の足を我知らず掴んだ。

「なんか……ここ。わたしの入れる場所じゃないっていうか……」

「それは君の心像だろう？」

「心臓？」

「心の像の心像だよ。過去の経験とか記憶から、君が心の中に創り上げたものってことだ」

「つまり、思い込みってこと？」

「ああ、そうだな。思い込み」

「そうだとしても、わたしの身の丈に合わないっていうか……庶民の安らぎみたいなのが感じられないと……萎縮しちゃうというか……」

「真子、そんな馬鹿馬鹿しい考えは捨てる。家なんか、単なる物でしかないんだぞ」

「そんなことはわかります。和磨さん、なんでそんなに怒るんですか？ あんまり心細いから、慰めが欲しくて、正直に口にしたのに……」

「君が……まあ、いい。とにかく萎縮する必要なんてない。君には俺がついてるんだぞ」

口喧嘩したおかげか、真子の萎縮が少し緩んだ。

家の裏側に広い駐車場があった。しかし、駐車場の入り口は、重そうな格子の扉で閉ざされている。

「こいつを開けてもらわないと入れないな。真子、君、インターフォンを押してこい」

「えっ、わたしが？」

「ああ、俺は運転席で待機してるから……ほら、行ってこい」

「だ、だってえ」

真子は和磨の命令に抗い、足を踏ん張った。

だって、野本さんの家、予想以上に格式ありすぎだし。

こんな家にお邪魔するなんて……やっぱり、もう少し改まった服装で来ればよかった。

「まーこ」

頭にボンと手が置かれた。

「心配いらない。会えば、それで何もかもうまくいくさ」

「そうでしょうか？」

「ああ。ビビってもいい、緊張してもいい……それでもうまくいく」

和磨さんってば適当なことを言っちゃって、と思うのに、不思議と心が安らいだ。

こういうのって、理屈じゃないみたいだ。

真子は車を降りてインターフォンの前に立った。手を上げて、押そうとしたが、勇気がいまひとつ足りず、なかなか押せない。

「真子、早くしろ！」

痺れを切らしたのか、和磨が怒鳴りつけてきた。振り返って、思い切り舌を出してやりたいが、和磨の報復が怖くてそれもできない。

なんで、こんな大きな家なのよお。足が竦むし、胃も引きつりそうだ。

半べそになった真子は、心の中でしこたま身勝手な文句を叫んだのだった。

「やれやれ、インターフォンを押すだけなのに、とんでもなく時間がかかったな。それで、返事はあったか？」

和磨さんときたら、断固として車を降りようとしなかったのに、わたしがインターフォンを押した途端に降りてくるとは。

「車から降りないんじゃないんですか？」

「君に勇気を振り絞らせようと思ってね」

「もおっ」

「はい。どちら様でしょうか」

ドアホンから上品な女性の声がし、真子の心臓が跳ねた。

こ、この人は、野本さんが言っていた『梅さん』という家政婦さんなのかな？

「あ、あのう。よ、芳崎と、も、も、申しますか……」

緊張のあまり、何度も噛んでしまい、真子は顔を引きつらせた。は、恥ずかしい！

「芳崎様？ あの、どのようなご用件でございますか？」

「え、えーっと、父に……い、いえ、あ、あの、野本さんと約束をして……」

「申し訳ございません、野本……では、わかりかねますが……」

実に申し訳なさそうに言われて、顔が赤らむ。まったくもってその通りだ。

隣で和磨が笑いを堪えているのが、腹立たしい。

回れ右して帰りたくなかったが、さすがにこのまま帰るわけにはいかない。

「あの、た、拓海さんと、約束をしております」

「坊ちゃまと？ 少々お待ち下さいませ」

坊ちゃま？

「坊ちゃま？ あいつ、坊ちゃまって呼ばれてるんだな」

くすくす笑いながら和磨がひそひそ声で言う。

「笑っちゃ悪いですよ」

ひそひそ声で叱責しつつ、ドアホンの向こう側の気配を窺うが、もう通話は切られているようだ。

「君だって笑ってるじゃないか？」

そんな言い合いをしていたら、ガレージの扉が開き始めた。